創立八十周年に寄せて
今、その歩みを顧みる

社会福祉法人　財団若葉会
若葉保育園
園長　保泉　欣嗣

若葉保育園は昭和十一年（１９３６年）一月、現在の行田市八幡町に託児所として設置され創立しました。当時は北埼玉郡忍町の時代で、町の足袋被覆産業の最盛期でもありました。しかし国政は、その後の戦争への道程ともいえる時代で、国内では同年二月の二、二六事件があり、翌十二年（１９３７年）七月には日中戦争の発端となる盧溝橋事件が、昭和の歴史に刻まれています。日本は軍事一色化の様相を呈して、自ずと富国強兵策が国家の最優先策に据えられたのも当時の社会情勢でした。その一方、当時の忍町は、大家族制度の下、家中が総出で働いていました。町内の主婦は家に居て、夜更けまで鈍い裸電球の下でミシンを踏んだり、手縫い仕事に専念して、懸命に貧しい家計を支えていました。

何処の家庭にも育ち盛りの子供が多く居て、仕事の足手まといになる子どもたちの預かり場所が切望されていました。必然的に託児所の設置が地域の喫緊の課題でもありました。数多の声を耳にして、一個人が託児所の設置を決断して実行したのが創立の契機になったと、設立した保泉近蔵翁から後年に聴いています。

最初に設置された園舎は羽生在で、もともとは養蚕小屋として使用されていた木造平屋建ての建物を譲り受けて移築したものでした。二階部分は天井が低く、そこでは明らかにお蚕が飼育されていたと思われ、平常は保育には使われず保育材料や備品などの物置同然の場所でした。今時では消防法上、耐震構造上からも環境衛生上でも保育所として公的認可される代物ではありません。戦中の当時、私は三年間その園舎で保育を受け集団生活を過ごしました。園舎には一様に坊主頭の男児とおかっぱ頭の女児が百人くらいが、ひしめきあいながらも仲良く遊び保育を受けていました。今にして思えば、託児所の設備、備品材料は粗悪でしたが、保護者達は実情を理解され、実に熱心な支援と協力を惜しみ無く尽くしてくださったようです。何とも和やかで温かみのある雰囲気でした。戦後も暫くは、全国民の食糧事情も物資も困窮状況が続いて、むろん給食などあろうはずがなく、児童は辛うじて代用食を持参してきたり、保母先生が近郷農家へ野菜の買い出しに訪れたりしてささやかな食糧を補給したりして児童の空腹を補っていました。

子どもたちの通園手段はリヤカーに近所の何人かが乗り合わせて、また、自転車の荷掛けに乗せて、また電車やバスで近郷の羽生、荒木、加須辺りからも通園していた児童が多勢いた記憶も鮮明です。わが子の成長に熱心な保護者たちは何一つ不平不満を言うではなく、暗黙の秩序とルールが当時の社会に定着していたのでしょう。何処の家庭も生活は苦しくても、個々人の自覚と責任があったからこそ、社会秩序が保持されていたと思います。

家庭での子どもたちは、兄弟姉妹が多い中、家の手伝いをしたり、お使いをしたりで家庭の一員としての役割を果たしていました。日々の生活の営みで精一杯では、学校でも陰湿な苛めもなく、家庭での虐待など見聞したこともありませんでした。地域住民が皆、融合して隣近所とのお付き合いも、子供同士の遊びも活発で、正しく共存の社会が出来ていました。遠くの親戚より近くの他人、という風潮が一般的な市民感情でした。

戦後、昭和二十三年には児童福祉法が制定され、保育所が公的に認可されました。俗に、団塊の世代の人達が多く誕生したころの時代背景です。憲法が公布され国民総力で戦後の復興が始まったとはいえ、物資も食糧も窮乏していました。終戦翌年の１９４６年、保育園にも米国からＬＡＲＡ（米国の慈善組織）物資といって食糧、医薬、衣料が配布され、大きな円筒形段ボール入りのコンデンスミルクやら粗末な雑貨品など配給されました。復興期は昭和三十年（１９５５年）頃までで、最早、戦後ではない、と首相は宣言しました。漸く飛躍的な経済成長期を迎えました。その頃の一般家庭には三種の神器と言われたＴＶ、洗濯機、冷蔵庫が普及しました。荒廃した戦後でしたが人は皆、自覚と責任ある行動を常としていましたから、社会秩序は保持されていたのでしょう。

先述しましたとおり、戦後も十数年